秋期福音特別集会（4）（大阪）

魂の故里

――ヘブル書第11章1～16節――

１９７８年11月5日
小池辰雄

根源現実　聖霊が実体で確証　信仰の現実でなかったら生きていられない　霊然的な自由　死の突破　天の故里　慕う処はキリストのあるところ

【ヘブル11】

1それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。2古えの人は之によりて証せられたり。3信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る。4信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物につきて証し給えばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る。5信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを証せられたり。6信仰なくしては神に悦ばるること能わず、そは神に来る者は、神の在すことと神の己を求むる者に報い給うこととを、必ず信ずべければなり。7信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救わん為に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。8信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けとの命に遵い、その往く所を知らずして出で往けり。9信仰により異国に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり、10これ神の営み造りたもう基礎ある都を望めばなり。11信仰に由りてサラも約束したもう者の忠実なるを思いし故に、年邁ぎたれど胤をやどす力を受けたり。12この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海辺の数えがたき砂のごとく夥多しく生まれ出でたり。

13彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎え、地にては旅人また寓れる者なるを言いあらわせり。14斯く言うは、己が故郷を求むることを表すなり。15若しその出でし処を念わば、帰るべき機ありしなるべし。16されど彼らの慕う所は天にある更に勝りたる

所なり。この故に神は彼らの神と称えらるるを恥とし給わず、そは彼等のために都を備え給えばなり。

●根源現実

御霊、御言に導かれて、正直、それに乗っかっている霊法の世界ですね。この集会が如何に霊然たる姿で進んでいるかということをひしひしと感じております。

第1回の前から、実はそれこそギリギリの人に私はぶつかって、それで魂と肉体のほどきができた。これがこの集会への隠れた準備であった。この最後の集会に至るまで、本当に不思議な導きで進んでいるわけです。この第4回でも、今橋君があのような証言をされた。また最後に――私は旧友の原田君が来るとは全然知らなかった――そうしたらば中津川からやって来た。お話のとおり、私に躓いた一番激しい人です。性格は激しくないんだけれども、その躓き方が激しかった。けれども、原田君は自分を偽らないでやっているから、いい加減な人じゃないです。それが今のお話の通り、我々はここで聞き入りました。そして、本当に原田君と一緒にキリストの十字架の前に平伏して、ハレルヤと言わざるを得ません。そういう二つの、始めと終りの証言にはさまれた感話は、これも一人びとり本当にその通り、みんなかけがえのない人たちが来ておられて、何とうれしいことかなぁと思って、本当に皆さんと一緒に酔うが如くして、一つ一つを承（うけたまわ）っていました。

今度の4回の集会は、結局これは大きな神の歴史の旅と同じく、一人びとりの個人の旅です。したがって、最後は黙示録の最後の世界に向かって往く。

ヘブル書11章、

1**それ信仰は望むところを確信し、**

「信仰は」というのは、さっきから申し上げている通り、ただ仰いでいるばかりではなく、信じ交わる世界、「信交」です。しかもそれは「信入」である。

「信は望むところを確信する」

という。もともと名詞で書いているんですけれども、「確信」という名詞は、いろいろな意味を持っている。もともと「待ち望む」「信頼する」という意味。それから「実体」「根底」「本質」、そういうような根底となるようなものがある、実体のあるものがある、という意味の言葉です。その次に、

見ぬ物を真実（まこと）とするなり。

この「真実とする」という訳し方も、本当は「エレンコス」という

「確証」「証拠」

です。或いは「担保」という意味を持っています。要するに、

「信仰が如何に実質的なものであり、実証的なものであるか」

ということ。これは「望むもの」だから、望んでいるのだから、まだわからない。まだわ

からないところの、見えないところのものの確証である。凡そ普通の信仰というのと違うことを言っているわけです。

「まぁ、分からないけれど、信じておこう」

というのが、大体普通の信仰です。ところが、申し上げている通り、望むのは願望でなくて、

「希望は上から来る」

というわけですから、

「神さまの約束、契約」

と同じような角度の言葉です。それの実証であり、確証であり、実体であり、本体である。

「信仰は」というけれども、今度はもう一つ奥のことがある。親鸞が『歎異鈔』で

「念仏者」

と言った。これは

「念仏は」

とも読むし、

「念仏者」

とも読む。どっちが正しいかではない。どっちも読む。またその両読みを持った方がいい。「念仏は」とか「念仏者」とかいう。

この場合も、「信仰は」というのは、

「信仰者は、信者は」

と、そう読んで差支えない。文法的には知りませんよ。けれども本当の霊的な神学的な読み方をすれば、「信仰は」は「信仰者は」といって読んで差支えない。何となれば、

「信仰者は、望むところをはっきりとその本質として現われているもの、また、見ぬところのものの確証、証者としてあるものだ」

と。信仰というもの、また信仰者はそういうものである。そうすると、

「いかにそれが本当の現実であるか、また本当の根源現実であるか」

と。何と言っても根っこの世界、根底の世界です。

●聖霊が実体で確証

普通は「おめでとう」〔お目出度う、お芽出度う〕というね、それは

「お芽出とう」

より先に、

「お根出とう」

なんです。種から先に出るのは芽じゃなくて根なんです。根っこが出てから芽が生えてくる。芽と根と逆にしちゃ困るよ。

種から根が生えて、それから芽が出て、これがだんだん幹になり、枝になり、葉になり、

花が咲いて果が実る。根、幹、枝、葉、花、果となる。

「根性を持て」

と言います。我々信仰者は本当の根性を持っているはずなんです。我々の根っこはキリストですから、御霊ですから。男は根性、女は愛情。しかしながら、この根性は、手放しの根性なんていうと頑な奴がたくさんできる。

この種、生まれつきの我から根が生えるためには、太陽の光や、水や、土の中の養分、それによって自分というものが破れる。己が破られなければ根は生えてこない。

「一粒の種、地に落ちて死なずば」

とキリストが言われた。地に落ちて破れなければ、死ななければ、多くの果を結ぶことはできない。要するに、自己が破れる本来の我は賜りたる無の世界。これは物凄い強烈な世界です。これは即無限無量の世界ですから。そういう根性。それから文化文明の世界。

本当の根性は福音が与える。この御霊の福音が入ってきたら、これは本当の根性が出る。そういう変化が起きる。人間革命が、人格革命が起きる。本当の信仰というのはそういうものだ。サブスタンス、実質、本体、実証だと。それが望むところのもの、見えぬところのもの、未来に対するところのもの――もう一つ言い換えれば――未来を内に持つ者という。未来を現在のうちに持つ者、現在の根源現実に持つ者、それが本当の終末的現在という。

「信は即ち現なり」

と申し上げているのはそのことです。その根源現実のあるところに現象が起きるんです、自在に。現象にとらわれるんじゃないです。たとえ現象が起きなくても、その現象は約束されている、天界において。地上においては或いは起きないことがあるかも知れない。しかし必ず天界で約束されている。

「5**そのとき瞽者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし。6そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり唖者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり。**」（**イザヤ35・5～6**）

との約束は、永遠の契約は、実にキリストが既に地上でもってそれを現象なさしめ給うた。

「私が言ったり、していることは終末の現実を今、徴として現わしているんだ」

と。本当は「徴」なんだ。黙示録の徴ですよ、これは。黙示録の世界、最後にパトモスでヨハネに示された霊的な幻、霊視された光景、これはそのまま現われるわけではない。これは全部、徴ですから、最後にあれがどんな現象となるかは誰か知らんや。その徴を示されて、その奥を見る人は見てください。またそこに何か示される。いくら物理の世界が素晴らしくて、不思議であっても、霊の世界は桁違いな世界です。

そのことを本当に身をもって示された。だから、キリストは躓きですよ。言うこと為すこと、みんな躓き。もうイザヤ書に預言されている通りです。だから、福音はなかなか受けとれない。

しかしながら、我々はどこかでその人らしい、ギリギリのところに入る。そうすると、

突破せしめられる。自分が突破するんじゃない、それが「お根出とう」の世界、皆さんさんは根出たい人。ヘブル書11章1節は正に根性の世界です。実体であれ、確証であれという。

「信仰は望むところの実体にして、見ぬ物の確証なり」

これは御霊が来なければ言えませんよ。御霊がこの実体です。御霊の実体が確証となっていくらでも展開していく。なるほど信とは正に「信受」です。

とにかく、福音書のドラマの中に入って、キリストに引っ張りまわされ、キリストの行為、これに動かされていく。

「わが言は霊なり生命なり」

というのは、口から出る言葉が霊なり生命なり、手足から発するところの業がまた霊なり生命なり。みんなこれは聖霊の世界から出ているから、言行一如と申し上げているのは、

「元は一つだよ」

ということです。

●信仰の現実でなかったら生きていられない

2 **古えの人は之によりて証せられたり。3 信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顕るる物より成らざるを悟る。4 信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ、之によりて正しと証せられたり。神その供物につきて証し給えばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なお語る。**

これはいいですよ。今度はエノク。エノクは凄いね。

5 **信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移し給いたれば見出されざりき。**

創世記のところをちゃんとそのまま受けとって書いてある。

「三百年神と偕に歩んだら、おらずなりき」

と。キリストなんかも、「おらずなりき」の人なんだ、本当は。いきなり天界へ往ってしまう。けれども、十字架にかからざるを得ない。二千年前に完了して、また既に現在完了で私たちに臨んでいてくださるから、これを受けとる。とにかく、そういった現実、実質なんです。根源の現実なんです。私はそれでなかったら生きていられないんだ。

ノアも、これも本当に「信仰によりて」と。アブラハム、イサク、ヤコブときて、

「みんなその往く処を知らずして出でゆけり」

とかね。神様は、

「その独子、イサクを献げろ」

と。アブラハムは、

「はい」

といって献げてしまったり、これみんな自分を徹底的に否定している。自分に対しては

「否！」

と言って、自分を乗り越え、自分を破って、神に

「然り！」

と言う。だから、もうこの聖書の預言者や使徒たちの信仰の現実の質の中に入ってゆかなかったら、もたないんです。またそれでなければ、本当に勝てない。それであるならば、どんなことがあっても勝ってゆく。

これはブラウニング〔ロバート・ブラウニング(Robert Browning, 1812～1889)イギリスの詩人〕の有名な詩だから御存知でしょう。

「私と一緒に大いに年をとってゆけ。
しかし、その老年において最善がそれでもなおあるのだ。
人生の最期、そのために最初がつくられた」

始めは目的の「ザ・エンド」でも「ザ・ラスト」でもいいし、終り「テロス」はまた目的でもある。人生の最期のために最初はつくられた。始めと終りが相呼応しているわけです。アルファーにしてオメガ。キリストと一緒に、

「我はアルファーにしてオメガなり」

という。

「我は幼児にして老人なり」

と。死ぬまで童心を持ってなければダメですよ。偉大な人間は童心を持っている。単純な心。いわゆる複雑なものは大したことない。

単純な、単一なるもの。一者、単一者。無者、この構造を持つ者、これが無限無量の展開をする。そしてこれは有機体的な、また非常にドラマティックなものを持つ。いわゆる複雑なものはダメ、これが始めにして終り。

人生のあらゆる時期は、幼年時代、少年時代、青年時代、壮年時代、老年時代、全部これは神の手、キリストの手の中にあります。

「ある全体的なものを私は計画した。

と、その人は言いました。それは神さまだと。

全生涯は神のプランの中にある。
青年時代はその半分に過ぎない。
神に信頼せよ、決して恐れるな」

と。キリストが、

「恐るるなかれ、我なり」

と言われた。恐れと疑い、これは禁物です。

●霊然的な自由

ブラウニングやホイットマン〔ウォルター・ホイットマン (Walter Whitman, 1819～1892) アメリカ合衆国の詩人、随筆家、ジャーナリスト、ヒューマニスト〕というような詩人は、非常に奔放な、自由自在な、本当に自分をぶちまけた詩を書いた人です。

ブラウニングという人はおもしろい人で、

「一つもできなくても百万を望め」

なんていうことを言っている。一歩一歩進むんじゃないんですよね、

「百を望んで一つもできなくてもいい」

というような言い方をしている。

「現在を犬にやれ、未来を捉まえろ」

なんていう言い方をしている。

「勇者にとっては最悪は最善である」

なんて言ってみたり、その気合がわかる。神から来るところの驚くべき思想です。「思想」という言葉ではなお表わせないようなもの。神の言の内容は、正に聖書から溢れているところのものは、それは如何なる「イズム」も捉むことのできない驚くべき内容を持っている。

「それは狭っ苦しい、ちょっとした小さな行為の中には到底つつみ切れないようなものだ。そういうふうに溢れて生きろ」

なんていう言い方だよな。そうかと思うと、

「私が決してあり得なかったところのもの、人々が私において貶（けな）したところの一切、それが私が神さまに対して価値あるゆえんである。」

もう相対的な良さとか、量だとか、そういったことを計っているような世界ではない。どこまでも質の問題です。私たちは聖霊を戴きますと、質の違った人間になるわけです。霊質の人になる。「霊」という言葉が下手すると誤解されて困るけれども、私たちはこの福音でもって霊と言うときは、

「聖霊、キリストの霊」

の他の何ものでもない。間違わないでください。いわゆる「霊的」なんていうのは困るよ。

「十字架の土台をもっているキリストの霊」

だけが、私たちが言う「霊」です。

そういう質になりますと、すること為すこと、とにかく、そこにおける質だけが問題になってくる。だから、仕事をしようと、学問をしようと、商売をしようと、あるいは事業をしようと、人間の質が変わってくると、する事、為す事、言う事の中に、みんなそれが表われてくるわけです。でなければ、どんなにそれが外側からつくってもダメなんです。ルソー〔ジャン＝ジャック・ルソー 1712～1778 フランス語圏で活躍した哲学者、思想家〕ではないが全く、

「自然に帰れ」

だ。人間の生き方も自然に帰れ、いや実に、人間の生き方は霊然なれよと。

人間が本当に自由というのは、道徳的な単なる自由じゃないですよ、霊然的な自由です。キリストの福音書の在り方を見れば、これが本当に自由です。自由とは何か、天的必然だよ、ざるを得ない世界。天的必然の世界に乗ると、これが本当の自由です。マルティン・ルッターも言った。「奴隷意志論」という。エラスムスの「自由意志論」に対してルッターは奴隷意志論をもってこれに

「ナイン！　そうじゃない！」

と言った。ルッターは、

「その自由は観念的には言えるだろう。けれども、現実はその自由は、人間は失っている。自己にとらわれているではないか。どこが自由だ」

と。彼は本当の自由をもって神の前に義たらんとして奮闘したが、とうとうぶっ倒れてしまった。独房に倒れてしまって、彼は死にそうだった。これは真剣勝負。ルッターもその闘いで行き詰まった。キリストの生命に本当に与っていなかったから、そのキリストの生命は、自分がどんなに自由であろうとしても、なれなかった。此処に自己の罪を見て、この罪を贖って、この我執をすっ飛ばしてくれた、このキリストの十字架というところに来た。それで彼は俄然そこから自分を乗り越えることができた。

●死の突破

パウロがそうだ。今までの、

「律法の義においては責むべきところなし」

だったが、

「これを塵芥（ちりあくた）の如く思う」

と言った。このキリストの義を戴くと、それで神の意志に百％に動いていた。このキリストの義を戴いたから。この義は実質的には聖霊が持っている。聖霊の内容が義であり、愛であるんです。だから、自分の自由に死ぬと、

「私の意志ではない、あなたの意志を」

といって、もう徹底的に自分を捨ててかかっている。祈りかかっている。その十字架において自分がすっかり吹っ飛ばされたことを、私は

「無者」

と申します。無者となると、無限無量なる自由がくる。栄光の世界に入る。人間はダメだから、相変わらず躓いたり、転んだりする。けれども、心配するな、必ずそれを乗り越えて往きます。

そういうわけで、我々はヘブル書11章1節、これだけだっていいんです。本当に信とはそのような実体であり、また実証であるが、その「実体、実証」を現実たらしめるものは

聖霊である。

「聖霊にあるところの実体、実証」

である。

我々は相対的な時間の中に生きている。やがて我々は死ぬ。次の世界がある。これが我々の現実の問題である。死はいつかは来るが、その前に、死を乗り越えた世界を本当に持っていなかったらダメなんです。此岸にいながら彼岸を歩くような歩き方をしなかったならば、死の突破はできない。

「我を受くる者は死すとも死なず。永遠の生命が汝のうちにあり」

とキリストが言われた。望むところのものを今、現に持っている。であるから本当に望める。

「御国をきたらせ給え」

と祈るのは、御国を持っているから、御国が私たちの中にあるから、「御国をきたらせ給え」と本当に祈れる。あの主の祈りはそれでなければ空念仏になってしまう。そして、「きたらせ給え」という祈りは、いつも自分が御国をそこに現じながら進んで往くわけです。現じながら進んで往かないならば、地上をして本当に地上たらしめていないということになる。

そういうようなことが「証し人である」ということです。証し人であるということは、キリストの生命を証していると同時に、将来の新天新地における現実を証している。それが本当に希望をして実質たらしめているところの姿である。だから、ロマンティシズムでもなければ、イデアリズムでもない。理想主義でもなければ、浪漫主義でもない。福音というのは、いわゆるローマン主義も、理想主義も、更に乗り越えたところの――もういえないです、主義では――何と言ったらいいだろうね。

●天の故里

13 **彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙に**
これを見て迎え、地にては旅人また寓れる者なるを言いあらわせり。

我々は旅人である。幕屋から幕屋を張りながら旅をしている。だから、イスラエルの出エジプトからカナンに至るまでの、あの曠野の旅が非常にそのことを表わしています。約束の地をめざしている。そこではいろんな不信行為が行われたけれども。モーセの信に応えないで、とうとうモーセはその彼らの罪を背負って、

「お前はそれを背負って、ヨルダンを渡って往かれずに倒れる」

と神さまに言われて、それでヨシュアがその後を継いで往ったんでしょ。

14 **斯く言うは、己が故郷を求むることを表すなり。15 若しその出でし処を念わ**
ば、帰るべき機ありしなるべし。

帰る、故郷に帰る。

「神より出でて、神によりて成り、神に至るなり」

と。神より出でて神に帰る。旅をしてまた帰って往くわけだ、この故里（ふるさと）というのは。

16 **されど彼らの慕う所は天にある更に勝（まさ）りたる所なり。**

と。誰でもが故里（ふるさと）を持っている。私は武蔵野が私の故里だけれども、U君なんかは大阪の一番繁華なところを故里にしている。いろいろ故里はあるわけです。けれども、最後のシオンのことは、都といったって――人間は地上の都に、都会に集まってくるけれども――しかし天界の都は、そういう都とは違うわけだ。要するに、故里に対する郷愁というものを誰でもがある程度持っている。そういうところから「故里」という言葉が何か慕わしい言葉になる。

私たちの魂は結局、キリストを故里にする。キリストの在るところが故里なんです。天界の黙示録の最後に、キリストのいらっしゃるエルサレム、天界のエルサレムは、キリストが即ち光となり、キリストが神殿である。この天のシオン、これが私たちの最終的な故里である。それに向かって私たちは往く。これを中心として、どんな姿で神の国があるか知らんけれども。

「視よ、神の幕屋、人と偕にあり。神、人と偕に住み」

とあるけれども、黙示録でもって徴のようにして示されているものは、あの輝かしい、楽しい、本当に人間的な意味においても豊かな、そういったところが私たちの最後の故里である。この新天新地の神の国に対する憧れ、それが私たちの信仰生活の原動力といいますか、それが神の国の最後の故里の世界。これに対するところの希望が湧いてきて、キリストが中心である。そして、一人びとりはみんなそれぞれの特色を十全に生かされている。

「キリストの姿に化する」

というのは同じ姿じゃないですよ。I君はI君らしく、U君はU君らしく、みなそのようならしさをもって、そうして全うされて、本当にみんなで神の国を形成してくる。そこでもって神の国の業に従っていく、そういう故里。地上ではそれが実現しないたくさんのことがある。情けない。しかし、それが全部満たされるところの故里。だから、天国が故里なんです。パラダイスが故里。私たちはそのような、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

という、その

「パラダイスを、故里を今、現にキリストと共に歩きながら、その最後の故里を望む」

という、こういう希望を現実としながら故里をそこにもつ。至るところこれ故里である。故里にしてしまう。

「あの人のいるところは、何だか知らんけれども暖かくて慕わしいなぁ」

と、その人が即ち故里の中心になる。そのように至る所、故里にするようなことができるのは、キリストという故里の実体と一緒に歩くところに、本当に成っていくわけです。

●慕う処はキリストのあるところ

だから、

「慕う所は天にある更に勝りたる所なり」

であるけれども、本当にこの言葉を身につけるためには、慕う処はキリストのあるところ、そこが故里であり、「ファーターラント〔Vaterland〕、祖国」である。

そのようなこととちょっと似たようなことを言っている詩がある。それはノヴァーリス〔Novalis（1772～1801）ドイツ・ロマン主義の詩人、小説家、思想家〕というドイツの詩人ですが、

「もし私がキリストさえ持つならば、私は、一切はどうでもいい。私の旅の杖に従って来なさいとキリストが言われる。そして忠実な心をもって私のこの主に従って往きましょう。他の人たちをして勝手に自分たちの道を往かせろ、幅の広い楽な道を往かせろ。私はこの狭い道を通って往くぞ。彼さえ持っていれば、私は何処でも楽に安らかに眠れる。いつもキリストを持っているところ、そこが私の祖国である」

「いつもキリストを持っているところが私の祖国である」

という言い方をしている。

「そこがまたパラダイスである」

という言い方をしている。

即ちキリストと共に歩いて往くところ、そこがいつも故里をそこに現じて、またそういう歩き方をすることが、天にあるところの慕わしい故里を慕って歩く歩き方である。だから、地上においてキリストと一緒に、キリストの御霊を内に宿して歩くところ、そこに故里の原型がある。それだから、神をしてヘブル書で言っているところの、天界に対するところの本当の希望、喜びといいますか、そういうものが湧いてくる。こういうわけであります。

人生の旅も、また世界の歴史も、この神の本願が成就するところの、キリストの救いが完成するところの、その事態に向かって進んで往く。もしそうでなかったら、

「一切は空（くう）の空なるかな、すべて空なり」

という。今、地上には、日本には希望はないです。天界からだけ希望はやってくる。まぁいろんな文化文明でもって、人の心や目や耳を楽しませてはいるよ。けれども、それは虚しく消えていく。私たちはそういうものではない。私たちの旅は、消えざるもの、そのようなキリストという驚くべき実体を私たちのうちに宿すまでは、どうにもならないようにできている。あなた方の証言の通りです。いいですか、それでもって往きます。本当に、

「我を視よ」

と。この使徒行伝の使徒たちと共に、この使徒行伝の続きを私たちは進んで往きます。然らずんば信仰ではない。終ります。